

私の学生時代

薬学部
薬学科

教授 和田 啓爾



学生時代で最も印象深いのは北大大学院(薬学)の時です。修士、博士課程を通じ、毎朝9時前から夜11時頃まで年中無休の研究室暮らしでした。講座には大学院生が総勢10人くらいは在籍していましたので、家族以上の付き合いでした。日中は個々に実験に没頭し、鼻歌や、冗談の掛け合いをしながら研究していました。

月曜は実験報告会、水曜は院生ゼミ、



院生時代の研究風景。
失敗はすべて自己責任なので、目つきは真剣?

木曜は文献紹介ゼミと結構ハードスケジュールでした。そんな研究生活の中で、レクリエーションはスポーツです。毎年、講座対抗のソフトボール大会があり、皆、結構燃えました。ある年、私の講座が決勝戦でノーヒットノーランを達成して優勝しました。私は捕手でしたが、投手がソフトボールなのに変化球を投げるので、神経を使いました。キャッチャーフライを捕球する時も球が激しく回転していたので落球したら先輩に何と言われるかドキドキしました。私はもともと左利きで、スイッチヒッターです。左打席のほうが飛距離はでますが、写真はたまたま右打席の時のものです(フォームは結構いいかも)。

夜、教員が帰宅すると、研究室で頻繁に鍋を囲んで院生の飲み会をしました。他講座の院生も時々飛び入りしていました。アルコールが入ると普段言えないまじめな研究の話で盛り上がり、相手の研究内容



講座対抗ソフトボール大会での打席。実験中より真剣な顔つき?頭上に打球があることから相当な飛距離の本塁打の瞬間か(笑)

や成果について結構厳しい議論をしました。でも、それはお互いに研究内容を十分に理解しているからであり、研究に対してより向上心が高まった充実した時であったように思います。今の自分があるのはこの時の仲間との真剣なやり取りだったと思っています。先輩から、「自分の手がけた研究は、世界の最先端だと思え。誰よりも一番研究内容を理解していなければならぬ!」という言葉が忘れられません。

どんな小さな課題でも、真剣に取り組むことでほかの人には見つけることのできない自分だけの発見が待っていると思うとワクワクしてきません。

私の学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は和田 啓爾教授と本谷 亮講師のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

私の学生時代

心理科学部
臨床心理学科

講師 本谷 亮



元々医療領域に興味はありましたが、志望校を立て続けに落ち、くすぶっていた浪人時代、目に留まったのが“北海道医療大学に新設の心理科学部誕生”というパンフレットでした。心理学=文系というイメージが強く、理系であった私には、心理学に興味はありながらも、それを学ぼうという考



スーパカレーとうどんを出品し、大盛況だった九十九祭にて(前列右から6番目が私)

えはありませんでした。しかし、心理科学部臨床心理学科での“医科学系も学び、心を科学的に理解する”というユニークさに惹かれ、「これだ!」と入学を決めました。ただ、それでも合わなければ…という思いも片隅にあったくらいですが、結局その後、大学院博士後期課程までの9年間(人生の約4分の1!)医療大に在籍し、今もこうして学生時代に学んだことを活かした仕事に就いている事実を考えると、自分の選択は間違っていなかったのだと再認識します。厳しくも温かい恩師との出会い、叱咤激励してくれる先輩、苦楽を共にし、刺激し合える友人や後輩たちの存在は自分の財産ですね。

さて、学生時代ですが、ほぼ毎日、アルバイトをしていました。その分、アルバイトが休みのときは、同級生と飲みに行ったり、朝まで談笑したり、友人が立ち上げたサークルに参加するなどしていました。写真は、そのサークルで学祭に出品した際の一枚です。



ハワイの海で初のボディボード後、プレゼントされたアロハシャツを着て

また、単純で、人から影響を受けやすく、友人が「身体ぐらい鍛えていない!」と言えばそうだなと思い、スポーツジムに通い始め、「やっぱり英語ぐらいは話せない!」と耳にすれば確かにと思い、英会話を学びに行き、とやりたいことはとりあえず実行に移していました。ひよんなことで知り合い、交流を深めたアメリカ人の知人を訪ね、単身でハワイに行った(人生初の海外旅行)の思い出です。大学外での活動は、大学とはまた違った出会いや発見があり、自分の価値観をさらに広げる良い機会になっていたと思います。

紙面では書ききれない失敗談も多々ありますが、70%くらいは糧になっているかなと思います。